慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	アメリカン・ルネッサンスの理論的転回
Sub Title	The theoretical turn of American renaissance
Author	巽, 孝之(Tatsumi, Takayuki)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2021
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.121, No.1 (2021. 12) ,p.114- 128
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	識名章喜教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01210001-0114

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

アメリカン・ルネッサンスの理論的転回

巽　孝之

0.時代区分というスピーチアクト

アメリカ文学思想史を考える時、これまで「アメリカン・ルネッサンス」の名で長く台風の眼を成してきた概念を回避するわけにはいかない。周知の通り、これは1941年にハーバード大学教授フランシス・オットー・マシーセン（Francis Otto Matthiessen, 1902-50）が自著のタイトルに掲げたものである。彼は当初、テーマを中心に『民主主義の文学』『曠野の人間』『東から西へ』といった仮題を構想しており、最終的には19世紀半ばにおけるアメリカ文学史上でロマン主義が台頭した一時代を扱うつもりで『アメリカ文学の黄金時代』なる表題に決め、オックスフォード大学出版局から許可を得た。しかしそのあと、教え子にして若い同僚の比較文学者ハリー・レヴィン（Harry Levin, 1912-94）の助言により、土壇場になって「アメリカン・ルネッサンス」というタイトルに路線変更し、出版後には、21世紀の今日に至るまで、その名は一種の行為遂行言語（パフォーマティヴ）として架空の時代区分があたかも当時から実在したかのように生命を吹き込み、筆者自身を含む19世紀アメリカ・ロマン派文学の研究者のみならず、アメリカ文学史に取り組む学者批評家全般に取り憑いて離れなくなったのである。

1.ルネッサンス・ヒューマニズム

今日、「アメリカン・ルネッサンス」には概ね三つの意義が考えられよう。

第一の意義は、本来ヨーロッパに特権的な時代区分「ルネッサンス」が新興国

家アメリカ合衆国にも適用可能なのだという、とんでもなく突飛な奇想だ。本来古典復興を意味する「ルネッサンス」が、そもそも歴史のほとんどないアメリカ合衆国の、それも建国後半世紀程度しか経っていない19世紀中葉に、いかなるかたちで応用されるのかは、大方の興味を惹く。しかもマシーセンは元々、『翻訳――あるエリザベス朝芸術』（1931年）なる著書もあるほどに、イギリス・ルネッサンスに詳しい。

だが、よくよく考えてみれば、そもそもヨーロッパのルネッサンス概念そのものが、19世紀スイスの歴史学者ヤーコブ・ブルクハルト（Carl Jacob Christoph Burckhardt, 1818-97）の名著『イタリア・ルネッサンスの文化』（1860年）によって発明されたものだ。彼は先行する16世紀イタリアの画家・建築家ジョルジョ・ヴァザーリ（Giorgio Vasari, 1511-74）が『イタリア美術家列伝』（1550年）において、古典古代美術がゲルマン民族によって破壊されるも、その後に古代の美学が復活し中世とは異なる時代が到来したという意味で「リナシタ」“rinascita”という語を用いたが、それは以後、ゲーテやヴォルテール、スタンダール、ミシュレらに大きな影響を与える。16世紀がヨーロッパ全体における古典復興時代であるという概念は、その過程で耕されていたのである。ブルクハルトは、そうした経緯をふまえた上で、16世紀に大航海時代に象徴される「世界の発見」が起こり、いわゆる多芸多彩な時代の寵児が数多く出現したことで「人間の発見」が起こったことを強調し、国家も戦争すらも芸術作品と見る「ルネッサンス」概念を提唱した。この時、今日のわれわれが世界史的に自明の時代区分と見る「ルネッサンス」が、まさにブルクハルトの行為遂行言語（パフォーマティヴ）によって創出されたと言ってよい。

したがって、それから80年後にマシーセンが1850年から55年の期間をアメリカ文学史上最初の黄金時代という意味で「アメリカン・ルネッサンス」と命名してエマソン、ソロー、ホーソーン、メルヴィル、そしてホイットマンに対象を絞り、その時代がアメリカの西漸運動に伴う領土拡張主義政策の高揚期と一致することに気づいた時、そしてまさにそれがロマン主義と民主主義の融合した作品群を輩出した時代であったことを前景化した時、ブルクハルト的な「世界の発見」と「人間の発見」のシナリオを反復し再利用できると確信したとしても、全くおかしくはない。実際、15世紀末から16世紀に至るヨーロッパの大航海時代がアメリカという新世界の発見を基軸に展開したとすれば、それは19世紀中葉のアメ

リカが「明白な運命」なるスローガンのもとに西部開拓を徹底化し、フロンティアを消滅させ、「世界の再発見」に至った流れに対応するだろう。

加えてヨーロッパのルネッサンスにおける多芸多才の人々、たとえばレオナルド・ダ・ヴィンチやガリレオ・ガリレイ、サー・ウォルター・ローリーやジョン・ディー、それにほかならぬエリザベス女王自身がいわゆる「ルネッサンス・マン」としてひしめき芸術的黄金時代を彩ったのと同じように、アメリカのルネッサンスにおいても、多芸多才といえば詩人・小説家・批評家・編集者を兼ねたエドガー・アラン・ポーをはじめ、代用教員から捕鯨船員、作家の上に美術批評家、税関役人までを兼ねたメルヴィル、それに作家・思想家・博物学者・環境保護運動家など多彩な顔を持つソローなど実例に事欠かず、それが「人間の再発見」をもたらしたとしても不思議はない。そしてマシーセンは、まさにアメリカン・ルネッサンスの中にイギリス・ルネッサンスの代名詞シェイクスピアの復権を見出し、アメリカ文学が過去の文学的遺産をいかに攻略するか、まさにその点にこそ「古典復興」の意義を求めたのだ。

2. トランスアトランティック・ロマンティシズム

だが、ここでアメリカン・ルネッサンス第二の意義を語るなら、それはアメリカ独立革命の同時代人であるプロイセンの啓蒙主義哲学者イマヌエル・カント（Immanuel Kant, 1724-1804）がいかに詩人思想家サミュエル・テイラー・コールリッジ（Samuel Taylor Coleridge, 1772-1834）に代表されるイギリス・ロマン派を経て超越主義思想家ラルフ・ウォルドー・エマソン（Ralph Waldo Emerson, 1803-82）が率いるアメリカ・ロマン派へ影響を与えたかという道筋のうちに、啓蒙主義からロマン主義へ至る環大西洋的な知的発展が見られる点であろう。

アメリカン・ルネッサンスのロマン派作家たちが多かれ少なかれカントを代表格とするドイツ思想を摂取していたことについては、スタンリー・ヴォーゲルが1955年の研究書で詳細に分析している。とりわけカント的な実践理性概念は、エマソンの提唱する「無限の感覚」に基づく超越主義概念と縁が深い。具体的な受容に関しても、18世紀はいざ知らず、1830年代に入ってからはハーバード大学図書館を中心にカントを含むドイツ人思想家の著作が大幅に入ることになり、英訳は依然そろっていなかったにせよ、コールリッジの批評を媒介にしてカント

の体系を知る人が増えていた（ヴォーゲル『アメリカ超絶主義者に見るドイツ系文学の影響』序章、第二部、付録参照）。

したがって、アメリカン・ルネッサンスを啓蒙主義と連動する人間中心主義を発展させたロマン主義の時代と理解するならば、当初マシーセンの設定した1850年から 55年までという狭義の準拠枠は、論者によっては 1832年前後から南北戦争直前までのおよそ30年間を指すようになった。これは具体的には、1832年に超越主義者ラルフ・ウォルドー・エマソンがユニテリアンの牧師を辞任した時期を起点とし、1859年にイギリスの生物学者チャールズ・ダーウィンが人種論的にも画期的な『種の起原』を発表するまでの約 30年間に相当する。もっとも、ロバート・レヴィーンが筆頭編者を務める最新のノートン版アメリカ文学傑作選第 9版（2017年）においては、実質的なアメリカ・ロマン主義時代は 1820年から 1865年にまで拡張されている。そこには、アメリカ初の職業作家とされるワシントン・アーヴィングやジェイムズ・フェニモア・クーパー、それにアメリカ先住民作家ウィリアム・エイプスから —— ポスト・マシーセン・キャノンというべき正典作家たち（ポー、ホーソーン、メルヴィル、エマソン、ソロー、ホイットマン、ディキンスン、ストウ）を経て —— 黒人奴隷フレデリック・ダグラス（ Frederick Douglass, 1817-95）やハリエット・ジェイコブズ（Harriet Jacobs, 1813or 1815-1897）へ至る主要テクストが収められている。こうした時代区分再編成が興味深いのは、これまで 南北戦争へなだれ込むきっかけの一つである「1850年の妥協」を中心に組まれていたアメリカン・ルネッサンスが、1823年のモンロー・ドクトリン宣言から 1865年の南北戦争終結時までを含むスパンへ変容したことであり、それは具体的には、エイペスやダグラス、ジェイコブズのような非白人作家たちをも組み込みやすい新たな準拠枠が登場したことに等しい。

3. オールアメリカン・ナショナリズム

だが、さらにもう一つ、アメリカン・ルネッサンスは第三の魅力を放つ。それは世紀転換期の米西戦争から第二次世界大戦勃発にかけての期間、すなわちアメリカ合衆国が世界の帝国主義ゲームの覇者として20世紀そのものを構築していく歩みにおいて、まさに民主主義とロマン主義の融合した 19世紀中葉の中にこそ、現代アメリカのナショナリズムを根本的に成立させることになる国民的精神

の発揚を再確認したことだ。

ふりかえってみれば、アメリカ文学が長くイギリス文学へのコンプレックスを抱いていたことは明らかである。アメリカン・ルネッサンス最大の正典作家というべきナサニエル・ホーソーン（1804-64）のことをメルヴィルが「アメリカのシェイクスピア」と呼んだのは、その証左の一つにすぎない。だが、ここで肝心なのは、米西戦争およびそれに続く米比戦争を経て、紛れもなく大国となったアメリカ合衆国が、その文化においてもヨーロッパ列強に引けを取らぬようにと、懸命に自らの文化史を、とりわけ文学史を構築しようと躍起になることだ。

俗にアメリカ文学を代表する「顔」と言ったら、名作『陽はまた昇る』（1926年）で知られる「ロスト・ジェネレーション」の代表格アーネスト・ヘミングウェイだが、さて、まさに彼が大活躍を始める1920年代ジャズ・エイジこそは、アメリカ合衆国が未曾有の好景気に沸きかえるとともに、アメリカ文学史が本気で織り紡がれようとしていた時代であった。第一次世界大戦を終えて愛国心が芽生えていたアメリカでは、1919年がちょうどメルヴィルの生誕百周年にあたっていたため、20年代には未曾有のメルヴィル再評価の風潮がわきおこり、それは彼の代表作『白鯨』（1851年）を楯に、長い歴史を誇るイギリス文学史へ拮抗するだけの強力なるアメリカ文学史の準拠枠を作り上げようと、アカデミズムの気運を一気に盛り上げていく。その首領格にはスミス大学のニュートン・アーヴィンやニューヨーク市立大学のアルフレッド・ケイジン、サラ・ローレンス大学のマックスウェル・ガイスマー、コロンビア大学のライオネル・トリリングなど、錚々たる学者批評家たちがずらりと並ぶ。前世代に属すコロンビア大学教授カール・ヴァン・ドーレンが、1917年から21年にかけてケンブリッジ版アメリカ文学史を編纂したのは、そうしたアメリカ独自の文学史的意識の高まりを最も徴候的に表しているだろう。その甲斐あって、1928年には北米を代表する文学研究組織である近現代語学文学協会（MLA）の中にようやくアメリカ文学の分科会が創設され同年には学術雑誌として〈ニューイングランド・クォータリー〉が、翌　1929年には〈アメリカン文学〉がそれぞれ創刊された。

そうしたアメリカ文学の準拠枠編制が盛んになるにあたり、じつはいちばん貢献度が高かったのがひとりのイギリス作家であったことも記しておかなくては公正を欠く。それは、『チャタレイ夫人の恋人』（1928年）など強烈なエロティシズム文学においても著名なD. H. ロレンス（David Herbert Lawrence, 1885-

1930)、作品の名は、彼が1920年には脱稿し23年に出版した『古典アメリカ文学研究』。本書は植民地時代のベンジャミン・フランクリンからロマン派のポー、ホーソーン、メルヴィルらアメリカ作家たちのうちに、とりわけ彼らの織り紡ぐマッチョな開拓者的人物類型フロンティアズマンのうちに自らの文学的似姿を積極的に見出す文学史的名著である。そしてアメリカ側からは、ようやく 1936年になって、ヴァン・ワイク・ブルックス（Van Wyck Brooks, 1886-1963）が、実質的にアメリカ・ロマン派に対応する作家たちを網羅した『花ひらくニュー・イングランド　1815-1865』を発表し、現代アメリカ作家が新たなフロンティアを開拓するのに忘却されがちな「使用可能な過去」があることを示すに至る。

だからこそ、マシーセンが 1941年、すなわち太平洋戦争開戦の年に『アメリカン・ルネッサンス』を発表し、19世紀中葉の民主主義とロマン主義の融合を一つの理想として、ホーソーンとヘンリー・ジェイムズ、そしてT・S・エリオットを貫く「過去の感覚」の伝統を強調したのは、結果的にアメリカ的ナショナリズムを再確認する手続きと映った。それは、必ずしも彼自身が典型的なヤンキーであったことを意味しない。マシーセンはキリスト教的社会主義という複合的なイデオロギーを貫いたが、一方では同性愛嗜好を隠匿していた。じっさい 1924年には、オックスフォードへ戻る船旅の途上で出会った年長の青年画家で同じくイエール大学卒業生のラッセル・チェイニー（ 1881-1945）と恋仲になり、熱烈なラヴレターを交わし、ホイットマンの「僕のための歌」の中にも自分たちの恋愛を読み込むに至る。 1950年の自殺も、それに五年先立つ 1945年に最愛のチェイニーが亡くなったことが原因とされる。マシーセンが民主主義とロマン主義の融合形態に見たキリスト教的社会主義の理想郷は、必ずしも白人男性異性愛社会で育まれたものではなかったにもかかわらず、結果的に『アメリカン・ルネッサンス』があたかもアメリカを代表する典型的ナショナリズムの書物であるかのように受容されてしまったのは、皮肉というほかない。第二次世界大戦はまぎれもなく西半球と東半球を切り結ぶ「世界の再発見」であるとともに、その双方を強力に支配しうるアメリカ人という「人間の再発見」だったのだから。

だが、まさに本書がアメリカ文学史上の記念碑として屹立したからこそ、戦後には英国のケンブリッジ大学大学院生であったトニー・タナー（Tony Tanner,1935-98）がカリフォルニア大学バークレー校へ留学した成果を、アメリカ・ロマン派からモダニズム、ポストモダニズムまでを切り結ぶ斬新なアメリカ

文学史を博士号請求論文として完成し、1965年には『驚異の支配』のタイトルで公刊するに至る。21世紀の今日ではオックスフォード大学アメリカ研究所長を務めたポール・ジャイルズのように、イギリス系アメリカ文学者は決して少なくないものの、半世紀以上前の時点では希少価値であった。かくして、タナーは同書が高く評価されたことによりケンブリッジ大学の専任になるばかりか、イギリス初のアメリカ文学講座の開設者として名を残す。

以上、アメリカン・ルネッサンスがいまもたゆまぬ批評的研究を許すゆえんを、ルネッサンス・ヒューマニズムとともに、環大西洋的ロマンティシズム、さらには戦後の北米ナショナリズムという三つの意義に求めた。しかし本論の目的は、そうした常識の再確認ではない。むしろアメリカン・ルネッサンスが長いこと囚われてきた一定の呪縛を解き放つ運動こそが1980年代以降の理論革命の標的だったことを、明らかにしたいと思う。

4.象徴主義支配の物語学

ひとむかしまえであれば、アメリカン・ルネッサンスの理論的発展史をまとめるのは、さほど難しい作業ではなかった。モダニズムの巨匠エリオットに啓発され1930年代から40年代にかけて勃興した新批評の影響がまだ冷めやらぬ時代、すなわち1950年代から70年代にかけては、そもそもマシーセンへの反論として書かれたチャールズ・ファイデルスン・ジュニアの『象徴主義とアメリカ文学』（1953年）を皮切りに、R・W・B・ルイスの『アメリカのアダム』（1955年）やリチャード・チエイスの『アメリカ文学とその伝統』（1957年）、ハリー・レヴィンの『闇の力』（1958年）、ダニエル・ホフマンの『アメリカ文学の形式とロマンス』（1961年）、ロレンス・ビュエルの『文学における超絶主義』（1973年）、ジョン・アーウィン『アメリカ的象形文字――アメリカ・ルネッサンスにみるエジプト象形文字の象徴』（1980年）といった、アメリカ文学研究一般においても必須の文献をリストアップしておけば事足りた。とりわけファイデルソンの書物は、マシーセンのようにイギリス・ルネッサンスの鏡像をアメリカ・ロマン主義文学に見るのではなく、全く逆に、アメリカ・ロマン派文学は象徴主義文学の走りとしてそれ自体がヨーロッパ文学へ影響したのだという転覆的視点を提供したのが興味深い。マシーセンの本が太平洋戦争勃発の年に出版された一方、

ファイデルソンの本は朝鮮戦争休戦の年に出版されており、この時期すなわち米ソ冷戦初期の時代はアメリカ合衆国がすでに世界的超大国となった証として「パクス・アメリカーナ」とすら渾名されていた。20世紀前半はほぼ十年ごとにアメリカ出身作家がノーベル文学賞に輝いていた時期でもあり、かくしてアメリカ合衆国はハードパワーにおいてもソフトパワーにおいても世界の覇者となった。そんな時代に、ヨーロッパがアメリカ文学に影響したのではなく、アメリカ文学がヨーロッパの現代文学へ影響したのだとするファイデルソンの逆転の発想は必然的に登場したと言ってよい。

ところが、1960年代から70年代にかけて、ヨーロッパ系の構造主義や記号論、脱構築理論が導入される時代を迎え、米ソ冷戦の桎梏が徐々に緩み始めると、アメリカン・ルネッサンスの準拠枠も根本的変革を迫られる。

1980年代初頭にバーバラ・ジョンソンの『批評的差異』（1980年）やジョン・カーロス・ロウの『税関を通って』（1982年）という二冊の脱構築的アメリカ文学研究がポーやメルヴィルに関する斬新な解釈を提出したのちに、1985年には新歴史主義批評の立場に立ったウォルター・ベン・マイケルズと ドナルド・ピーズの編纂になる『アメリカ・ルネッサンス再考』とマイケル・ギルモアの『アメリカ・ロマン派の文学と市場経済』がまったく同時に刊行され、以後、この流れはドナルド・ピーズ自身の単著である『幻影の契約 ── 文化的コンテクストにおけるアメリカ・ルネッサンス文学』（1987年）やデイヴィッド・レナルズのマシーセン的な閉じた新批評的方法論を開いてみせる『アメリカン・ルネッサンスの地層』（1989年）、ピューリタン研究の御大サクヴァン・バーコヴィッチが新歴史主義批評の方法論から緋文字Aの曖昧さについて画期的解釈を施した『緋文字の役割』（1991年）などによって、強力に推進されていくからだ。

そして21世紀に入ると、ポストコロニアリズム理論家ガヤトリ・スピヴァクの惑星思考に準じる動きが目立つ。ミネソタ大学モリス校で教鞭を執るグレッチェン・マーフィは、1820年代以降のモンロー・ドクトリンの導入による半球思考がいかに19世紀アメリカ文学、それもリディア・マリア・チャイルドやジェイムズ・フェニモア・クーパー、ナサニエル・ホーソーンからヘンリー・ジェイムズにおよぶ政治的無意識に影を落としているかを探った『半球的想像力 ── モンロー・ドクトリンとアメリカ帝国のナラティヴ群』（2005年）を上梓した。その翌年2006年にはイエール大学教授ワイ・チー・ディモクが、13世紀のモンゴル

人によるバグダッドの古文書破壊とまったく同じことが、21世紀のアメリカ軍によるイラク国立図書館の破壊というかたちで起こっていることに注目し、8世紀もの時の隔たりにもかかわらず一定の因果律を結ぶ「深い時間」“Deep Time”が、たんに9.11同時多発テロとのあいだのみならず、ソローがインドの聖典『バガバッド・ギータ』を読んだことが20世紀インドの指導者ガンジーに逆影響を与えたことや、エマソンが14世紀のペルシャ詩人ハーフィズの詩集をドイツ語訳で読んでおり、キリスト教を相対化するイスラームやゾロアスターにもなじんでいたことを分析し、超越主義思想の成り立ちにも環大陸的メスを入れる。それに続くように、カリフォルニア大学サンタバーバラ校教授ユンテ・ホアンは、2008年に『環太平洋的想像力』は三部構成の第二部を全五章から成るメルヴィル論によって構成し、そこでは『白鯨』をエイハブ船長の内部における反資本主義的にして反民主主義的な偏執狂的蒐集癖に貫かれた長編小説と読み直す視点が、斬新だった。

このようにアメリカン・ルネッサンス研究は、新批評から新歴史主義へ及ぶ射程で耕され、大きな成果を挙げてきた。しかし、その流れにおいて長い間疑われなかったのは、ロレンスやブルックス、マシーセンらが活躍する以前から胎動していた、世紀転換期にアーサー・シモンズが『象徴主義の文学運動』（1899年）において提唱することになる象徴主義という巨大な準拠枠である。新批評が象徴や寓喩といった修辞学を尊重したのではなく、全く逆に、あらかじめ耕されていたモダニズム美学としての象徴主義が新批評を用意し、それと相性のいい現象学批評やヌーヴェル・クリティークと乗り入れたのである。それこそが1930年代のエドマンド・ウィルソン『アクセルの城』（1931年）を経て、1940年代のマシーセン、1950年代のファイデルソンやハリー・レヴィンへ至る過程で手堅く構築され、自明視されるに至った言説空間にほかならない。マシーセンはホーソーン、ジェイムズ、エリオットらの「過去の感覚」を吟味する系譜を、ファイデルソンはピューリタニズム、ロマンティシズム、モダニズムを接続する系譜をそれぞれ考察し、象徴主義文学史の前提をむしろ補強したのだ。われわれがマシーセン以後、アメリカ・ロマン派文学の帰結としてモダニズム文学が展開するものと信じ込んできたシナリオは、実はモダニズム的象徴主義の結果として逆説的に再構築されたロマン派文学史なのである。

そもそもシモンズの著書はアイルランド詩人 ウィリアム・バトラー・イエー

ツを強力に支持するものだが、その象徴主義ヴィジョンを裏書きするように、彼の名詩「学童に混じりて」”Among School Children”(1928)末尾の詩行「踊り子と踊りをどうして切り離しえようか？」“How can we know the dancer from the dance?”は、北米文芸評論の大御所エドマンド・ウィルソンが象徴主義文学論『アクセルの城』（1931年）において「もののみごとに掌握され不滅化された人生の一瞬」（a moment of human life, masterfully seized and made permanent）と高く評価するばかりか（チャールズ・スクリブナーズ版63頁）、続いてイギリスの主導的批評家フランク・カーモードが象徴主義的批評の白眉『ロマン派のイメージ』（1957年）でロマン派的伝統特有の芸術有機体説（art as organicism）の達成として分析するに至る（ラウトリッジ版 109頁）。そして、こうした先行する解釈はいずれも慣習に従い「踊り子と踊りをどうして切り離しえようか?」を修辞疑問としてのみ解釈し、そこに踊り子と踊りが溶け合った典型的な超越的瞬間を見出すことで一致していた。この時、英米の文学批評の巨匠が意見の一致を見たイエーツの象徴主義的意義は、以後も長く損なわれることがなかった。

ところがここへ、戦時中にナチスドイツに加担したジャーナリズム活動を隠蔽するようにして、戦後、ベルギーからアメリカへ亡命し、前掲ハリー・レヴィンを指導教授の一人としてハーバード大学大学院で学び、1970年代にはイエール脱構築派の領袖となるポール・ド・マン（Paul de Man, 1919-1983）が登場し、まさにこのようにロマンティシズムと象徴主義とを当然のように結びつける伝統的解釈自体に異を唱える。彼は修辞疑問とばかり慣用的に解釈されて来た「踊り子と踊りをどうして切り離しえようか?」なる一文には字義どおり、すなわち文法どおりの素朴な疑問文として意味をもつ可能性がまだ残っていることを決して捨象しない。60歳になった詩人の主体からしてみれば、これは必ずしも超越論的な瞬間ではなく、文字通り肉体的限界から来る視力低下の問題かもしれないのだから。かくして字義と比喩、文法と修辞、素朴な疑問文と修辞疑問文とのあいだはさほど単純に区分しえないことを、ド・マンは根本から問い直す。言い換えれば、このイエーツの詩行のうちに、ド・マンは「疑問文と修辞疑問文をどうして切り離しえようか？」というメタ疑問文の可能性を読み取るのだ。その結果、ミメーシス的弁証法の基礎を挫かれた読みは、ロマン主義的イメージが保証する超時空的法悦境に浮かぶシンボルではなく、時間性の支配する荒れ果てた廃墟のまっただなかに放り出された断片的アレゴリーによって脱構築される。何らかの

超越論的な意味や意図が先行して言語が操られるのではなく、まったく逆に、言語という物自体が先行して比喩形象や抽象概念と化し、時に荒野に住まう魑魅魍魎の姿を採り不穏な面持ちで蔓延して行くゴシック・ロマンスめいたドラマを、ド・マンほど生き生きと描き出した批評家はいない。そうした脱構築的方法論が教えてくれるのが、文学作品における象徴や寓喩を読むことではなく、そもそも我々が文学作品を辿っていくプロセスが示す言語の自己脱構築のドラマ、すなわち「読むことのアレゴリー」なのである。

そもそもド・マンはベルギー時代、ほかならぬアメリカン・ルネッサンスの代表的作家メルヴィルの『白鯨』のベルギー語（フラマン語）訳を行い、名論文「メタファーの認識論」ではメルヴィルの師匠ホーソーンの名短編「ラパチニの娘」にまで言及しているほどにアメリカ・ロマン派にも造詣が深かった。脱構築の提唱者であるアルジェリア系フランス人哲学者ジャック・デリダがプラトンに始まりヘーゲルで頂点を極める西欧形而上学の音声ロゴス中心主義的システムをエクリチュールの再評価によって根本から転覆しようとしたとすれば、ベルギー系アメリカ人批評家ド・マンは同様な視点から西欧形而上学とも重なる象徴主義の支配を根本から疑い、伝統的な象徴と寓喩の優劣関係を根底から転覆することで象徴の超越性を囲い込み、寓喩とアイロニーの親近性を前景化してみせた。われわれが長く文学作品の象徴や寓喩について議論してきたのは、実は西欧形而上学の支配と軌を一にする象徴主義の支配下で新批評的方法論を自明のものと見做してきた結果に過ぎない。たしかに我々はマシーセンを介して、例えばホーソーンの『緋文字』（1850年）でヒロインが胸につける真紅の「Aという文字」を姦通（adultery）から有能（able)、さらには天使（angel）までをカバーする曖昧性を帯びた寓喩（アレゴリー）と読み、その弟子メルヴィルの『白鯨』（1851年）において神とも悪魔とも、善とも悪とも取れる二律背反を身上とする「鯨の白さ」を象徴（シンボル）と読むことを学んだ。しかし、それはあくまでユダヤ＝キリスト教を根底に置く西欧的形而上学に準拠した修辞学に過ぎない。本質的な問題は、シモンズ以降ウィルソンやカーモードにまで受け継がれた象徴主義支配が、伝統的修辞学の内部矛盾に気付かぬまま維持してきた新批評的読解に潜んでいたのである。

5．結語：アフリカ系アメリカ文学批評の革命

最晩年のポール・ド・マンが名論文「理論への抵抗」（1982年）で展開したのは、ポスト構造主義の批評理論、とりわけ脱構築理論が試みてきた企ての一つが、「古典の三教科」の一翼でありながら長い間等閑視されてきた修辞学の復活であり、そうした趨勢を忌み嫌う「理論嫌い」の風潮は、そもそも文学の本質たる修辞学から目を逸らすものだとする対抗弁論であった。我が国でも基本的に食わず嫌いから理論嫌いを標榜し文学の情感や魂を希求する年長世代が存在するが、しかしそうした世代に限って、白人男性異性愛正典作家ばかりをくりかえし強調して恥じることがない。しかし、基本的に多民族で成るアメリカ合衆国の文化を吸収する限り、そのような戦略は自身の偏見に対しいささかの反省もなく文化的少数派を黙殺し続けることに等しい。

従って、理論の代名詞たる脱構築は、むしろ 1983年のド・マン没後になって初めて、アメリカの風土に実体的に定着したのではあるまいか。というのも、1980年代中葉以後には、アフリカ系アメリカ人学者批評家による脱構築の刷新が行われたからだ。折しも今日の BLM の原型というべき南アフリカのアパルトヘイト反対運動が全世界に蔓延した時代に、象徴主義の全体化指向を問題視し、聖書予型論的ミメーシスを転覆し、象徴ではなく寓喩の、そして記号表現の意義を再検討する動きが生まれたことは、少年時代から黒人音楽に親しんだメルヴィルの修辞的戦略をも再認識させてやむことがない。かくして 21世紀のアメリカン・ルネッサンス研究においては、2005年にマサチューセッツ州ニュー・ベッドフォードで開かれた第五回国際メルヴィル会議が統一テーマに掲げたように、白人男性作家メルヴィルと黒人逃亡奴隷フレデリック・ダグラスを類比する方法論が花開く。それは、白人男性異性愛正典作家を中心に編まれてきたアメリカ文学史を、まさにその内部から脱構築する脱正典化の実験であった。

こうした文学史脱正典化の口火を切ったのが黒人学者批評家ヘンリー・ルイス・ゲイツ（Henry Louis Gates, Jr., 1950-）である。その原点にはニューヨーク市立図書館ションバーグ黒人文化研究センターの古文書を徹底調査して多くの黒人奴隷体験記（slave narrative）を発掘・翻刻し「黒人女性文学シリーズ・ションバーグ・コレクション」全30巻の出版を実現させた業績がある。ここで重要なのはゲイツの批評理論がヘルメス神ならぬヨルバ族のエシュ神を題材に「黒人

解釈学」を唱え「文学人類学」の確立を目指し、黒人がたえず二重の声ならぬ二枚舌で語り白人文化を風刺してやまないというアフロアメリカ版トリックスター「いたずら猿」“Signifying Monkey”を中核に据えたことだ。

そうしたアメリカ黒人特有の転覆的想像力をふまえて読み直せば、例えばフレドリック・ダグラスが1845年に執筆した自伝の第6章で、黒人奴隷がプランテーションの女主人から、公には禁じられている読み書きを習ってしまった場合、ことわざをもじって「黒人に寸を許せば尺を望む」“If you give a nigger an inch, he will take an ell”と言い、まさに読み書き能力を獲得したことで黒人奴隷をもはや隷属させるわけにはいかなくなるいきさつを説明しているところも、十二分に「いたずら猿」のしわざであろう。

さらに黒人女性奴隷ハリエット・ジェイコブズの1861年の自伝では、同じように読み書き能力を獲得したあとに逃走の旅に出るが、その第20章において、彼女は文字どおり「ヘビの沼」（Snaky Swamp）と呼ばれる場所に身を隠し狂おしい一夜をすごしつつも「だが、これほどに巨大で有毒な蛇でさえ、文明的と呼ばれる社会の白人男たちよりは、わたしの心を脅かすものではない」(But even those large, venomous snakes were less dreadful to my imagination than the white men in that community called civilized)と語る。さらに第 34章では、このようにも述べている。「気候が暑くなってくるとヘビと奴隷所有者がそろって首を出すが、これらの有毒生物、わたしはどちらも好きじゃない。こんなことが自由に言えるようになって、まったくホッとする！」（Hot weather brings out snakes and slaveholders, and I like one class of the venomous creatures as little as I do the other)。当初たんなる病気の原因として表象された字義的なヘビが、やがて白人男性を表象するための換喩的なヘビと化し、ついにはドクター・フリント自身を表す有毒なる生物の隠喩として語られていくという比喩変貌の過程を見よ。かつてコットン・マザーの予型論はインディアンを排撃するのに「蛇」（serpent ）の比喩を用い、彼の内部では異教徒も黒人も悪魔も蛇も性的欲望も「内なる光」もすべて同じカテゴリーに分類されていったものだが、ここでジェイコブズは、まさしくそうした白人ピューリタン予型論の約束事を利用しながら、それをこんどは白人男性奴隷所有者を形容するための修辞的兵器として転覆し、黒人女性奴隷の視点から抜本的に再改造してみせたのである（巽『ニュー・アメリカニズム』第6章、 240-41頁）。

このようにダグラスやジェイコブズが白人キリスト教の伝統における象徴体系を転覆して編み出した逆予型論とも呼べる脱構築的修辞学は、別段、何らかの小難しい理論をわきまえたわけではなく、ただ広大なアメリカを生き延びるためにのみ編み出された、生存の祈りにも等しい言説体系であった。今日のアメリカン・ルネッサンスがこうした黒人逃亡奴隷のテクストをも射程に収め、その視点から、たとえばホーソーン『緋文字』におけるインディアン捕囚体験記の意義やメルヴィル『白鯨』におけるエイハブ船長の腹心の友でありエスニシティの記号表現そのものと呼べる拝火教徒フェダラーの意義を再検討しようと一歩を踏み出しているのは、まさにアメリカン・ルネッサンス脱正典化に必然的に伴う理論的転回の成果なのである。

WORKS CONSULTED

De Man, Paul. "The Rhetoric of Temporality" [1969], reprinted in *Blindness and Insight: Essays in the Rhetoric of Contemporary Criticism*, Second Edition. U of Minnesota P, 1983. Pp. 187-228.

Dimock, Wai Chee. *Through Other Continents: American Literature across Deep Time*. Princeton UP, 2006.

Douglass, Frederick. *Narrative of the Life of Frederick Douglass, An American Slave, Written By Himself*. Levine, 1000-66.

Gates Jr., Henry Louis. *The Signifying Monkey: A Theory of Afro-American Literary Criticism*. Oxford UP, 1988.

Jacobs, Harriet Ann. *Incidents in the Life of a Slave Girl*. 1861. Ed. Jean Fagin Yellin. Harvard UP, 1987.

Levin, Harry. *The Myth of the Golden Age in the Renaissance*. Oxford UP, 1969.

Levine, Robert et al. editors. *The Norton Anthology of American Literature Beginnings to 1865: Shorter Ninth Edition*. Norton, 2017.

Matthiessen, F. O. *American Renaissance*. Oxford UP, 1941.

Melville, Herman. *Moby-Dick*. 1851. Norton, 2002.

Murphy, Gretchen. *Hemispheric Imaginings: The Monroe Doctrine and Narratives of U.S. Empire* . Duke UP, 2005.

Tatsumi, Takayuki. "Literary History on the Road: Transatlantic Crossings and Transpacific Crossovers," *PMLA* 119.1 [January 2004]: 92-102.

Vogel, Stanley M. *German Literary Influences on the American Transcendentalists*. Archon, 1970.
Wallace, Robert. *Douglass and Melville: Anchored Together in Neighborly Style*. Spinner, 2005.
柴田治三郎編『世界の名著 45 ブルクハルト　イタリア・ルネッサンスの文化』（中央公論社、1961年）。
巽孝之『ニュー・アメリカニズム ── 米文学思想史の物語学』（青土社、1995年；増補新版、2005年＆ 2019年）。
中央大学人文科学研究所編『イギリス・ルネサンスの諸相 ── 演劇・文化・思想の展開』（中央大学出版部、1989年）。

* 本稿は日本ハーマン・メルヴィル学会第 8 回年次大会の特別講演として準備された。司会進行を務められた東京学芸大学教授・斎木郁乃、専修大学教授・上原正博の両氏と本塾文学部教授・佐藤光重氏、映像プロデューサーの山口恭司氏に深謝する。なお、本稿第 4 章には以前の拙論「アメリカン・ルネッサンスの光と影」（入子文子監修、谷口義朗＆中村善雄共編『水と光 ── アメリカの文学の原点を探る』［開文社、2013］所収）と若干重なる部分があることをお断りする。